2026 年度

卒業生調査・企業調査

調査結果サマリ

2026 年 10 月

茨城キリスト教大学

本サマリについて

本学では、教育の成果を検証し、教育課程や学生支援の改善に活かすことを目的として、2026 年度に「卒業生調査」と「企業調査」を実施しました。調査の設計・集計・分析は外部の専門機関（株式会社リアセック）に委託し、結果は「茨城キリスト教大学卒業生調査結果報告書（2026 年度）」（以下「卒業生報告書」）および「茨城キリスト教大学企業調査結果報告書（2026 年度）」（以下「企業報告書」）にまとめられています。

本資料は、両報告書の要点を本学の立場から整理したものです。報告書本体を読まなくても、今回の調査結果の全体像を把握できるよう構成しています。

集計集団は原則として「全体」を中心に記載し、学部別・業種グループ別で特徴的な傾向がみられた項目のみ付記しています。なお、卒業生調査の看護学部（8 人）・経営学部（16 人）、企業調査の「製造・建設」「専門サービス・金融」「公務」「その他」の各業種グループは回答数が少ないため、参考値として扱っています。

表記のルール

【データより】

- 調査データから直接読み取れる客観的な数値・結果を記載しています。

【解釈・考察】

- 上記の事実に基づく本学としての見解です。断定的な表現は避け、「～と思われます」「～と考えられます」といった表現にとどめています。

見出し・ボックスには報告書本体の該当ページを記載しています（例：卒 P10＝卒業生報告書 10 ページ、企 P12＝企業報告書 12 ページ）。図表は報告書本体からの抜粋、または報告書の数値をもとに本資料用に作図したものです。学部別・業種グループ別の詳細な数値やその他の設問結果は、報告書本体の該当ページをご確認ください。

両調査に共通する評価の枠組み

両調査とも、「PROG 白書 2021」で用いられている 17 項目の能力・スキル（ジェネリックスキル：汎用的技能）に、本学独自の 2 項目を加えた 19 項目を共通の物差しとしています。いずれも 5 点満点の加重平均値で分析しています。

領域	区分	項目
コンピテンシー	対人基礎力	1.親和力　2.協働力　3.統率力
	対自己基礎力	4.感情制御力　5.自信創出力　6.行動持続力
	対課題基礎力	7.課題発見力　8.計画立案力　9.実践力

領域	区分	項目
大学での学修		10.専門知識　11.一般教養　12.外国語能力　13.データサイエンス能力
リテラシー		14.情報収集力　15.情報分析力　16.課題発見力　17.構想力
本学独自項目		18.奉仕の精神　19.フェアな視点・態度

卒業生調査は「必要度」（社会〔職場〕で必要とされている度合い）と「修得度」（大学時代の学修で身についた度合い）を、企業調査は「必要度」（新卒段階で必要としている度合い）と「印象」（本学卒業生に対する印象）をたずねています。

※項目番号は卒業生調査に合わせています。企業調査では「10.一般教養」「11.専門知識」と番号が入れ替わっています。リテラシー領域の「16.課題発見力」は、対課題基礎力の「7.課題発見力」と区別するため、本資料では「課題発見力（リテラシー）」と表記します。

Ⅰ．卒業生調査の結果

1．調査概要（卒 P4）

【データより】（卒 P4, P128, P129, P131, P132）

- 調査対象：本学 2022 年度卒業生（卒業後約 3 年）
- 調査方法：インターネットによるアンケート調査／調査期間：2026 年 5 月 25 日～6 月 15 日
- 発送数 596 人（不達 47 人）、有効回収 138 人、集計対象 122 人（途中離脱 16 人を除く）、実質回収率 25.1%
- 学部別：文学部 58 人、生活科学部 40 人、看護学部 8 人、経営学部 16 人
- 大学生活の総合的な満足度は「とても満足」36.9%、「やや満足」54.9%で、計 91.8%が満足と回答（卒 P128）
- 回答時点で就業している人は 92.6%。就業者の職種は一般事務 17.7%、教員 12.4%、保育士 11.5%、販売・接客 8.8%、管理栄養士 7.1%、看護師 6.2%など。転職経験のない人は 71.7%（卒 P129, P131, P132）

2．必要度と修得度（卒 P7～P14）

19 項目の能力について、職場で必要とされる度合い（必要度）と、大学時代の学修で身についた度合い（修得度）をたずねました（N=122）。

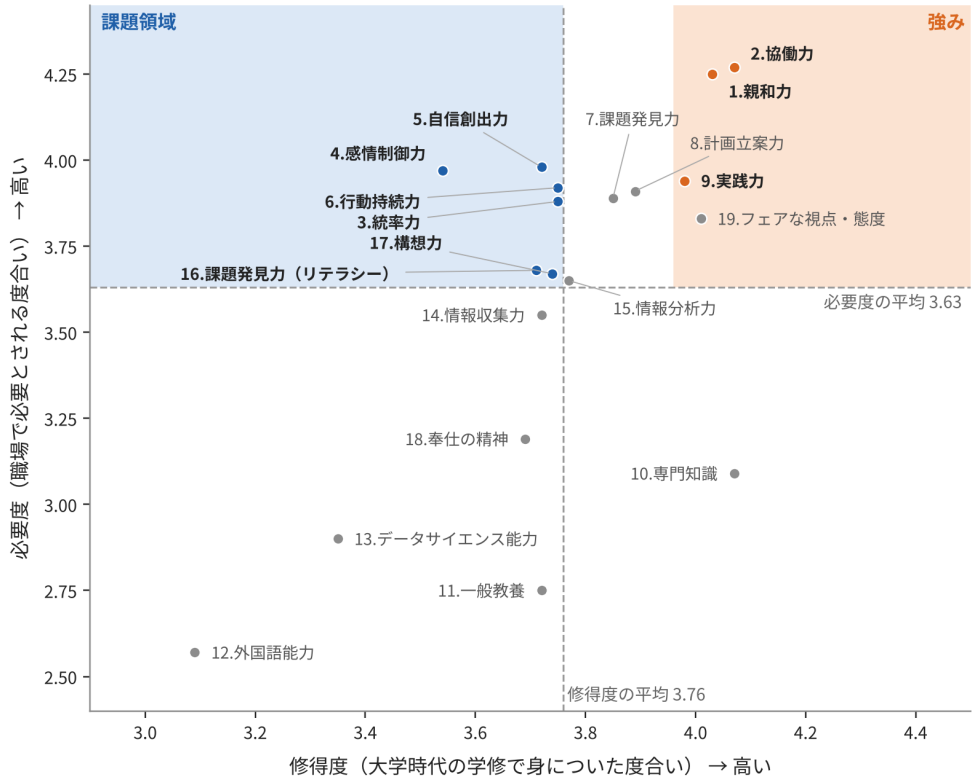


図 *1*：ポートフォリオ分析（縦軸＝必要度、横軸＝修得度）全体（卒 *P7, P8, P10* の数値をもとに作図）

【データより】（卒 P7, P8, P10～P12）

- 必要度が高いのは「協働力」（4.27 点）、「親和力」（4.25 点）、「自信創出力」（3.98 点）。低いのは「外国語能力」（2.57 点）、「一般教養」（2.75 点）、「データサイエンス能力」（2.90 点）（卒 P7）。
- 修得度が高いのは「協働力」「専門知識」（ともに 4.07 点）、「親和力」（4.03 点）、「フェアな視点・態度」（4.01 点）。低いのは「外国語能力」（3.09 点）、「データサイエンス能力」（3.35 点）、「感情制御力」（3.54 点）（卒 P8）。
- ポートフォリオ分析では、【強み】（必要度が平均より高く、修得度が平均+0.2 点以上）が「親和力」「協働力」「実践力」の 3 項目。【課題領域】（必要度が平均より高く、修得度が平均未満）が「統率力」「感情制御力」「自信創出力」「行動持続力」「課題発見力（リテラシー）」「構想力」の 6 項目（卒 P10）。
- 学部別では、文学部・生活科学部とも強みは全体と同じ 3 項目。課題領域は、文学部では対自己基礎力（感情制御力・行動持続力）とリテラシー領域（情報分析力・課題発見力・構想力）、生活科学部では統率力・感情制御力・自信創出力・構想力であった（卒 P11, P12）。

【解釈・考察】

- 人と良好な関係を築き、協力して物事を実行する力（親和力・協働力・実践力）は、卒業生が「職場で必要」と感じ、かつ「大学で身についた」と実感している力であり、本学卒業生の強みと考えられます。
- 一方、ストレス場面での気持ちの制御（感情制御力）、前向きさ（自信創出力）、粘り強さ（行動持続力）といった対自己基礎力は、職場で必要と感じながらも在学中の修得実感が相対的に低く、本学として重点的に検討すべき領域と思われます。
- 課題領域の現れ方は学部によって異なり、文学部ではリテラシー領域、生活科学部では対人・対自己基礎力に多くみられます。学部の教育特性に応じた違いがある可能性が考えられます。
- 「専門知識」は修得度が最も高い水準にある一方で必要度は相対的に低く、職種によって活用の場面に差がある力と位置づけられると思われます。

3. 在学中の活動：熱心度と満足度（卒 P17～P24）

7 つの学修・活動について、在学中にどの程度熱心に取り組んだか（熱心度）と、どの程度満足しているか（満足度）をたずねました（N=122）。

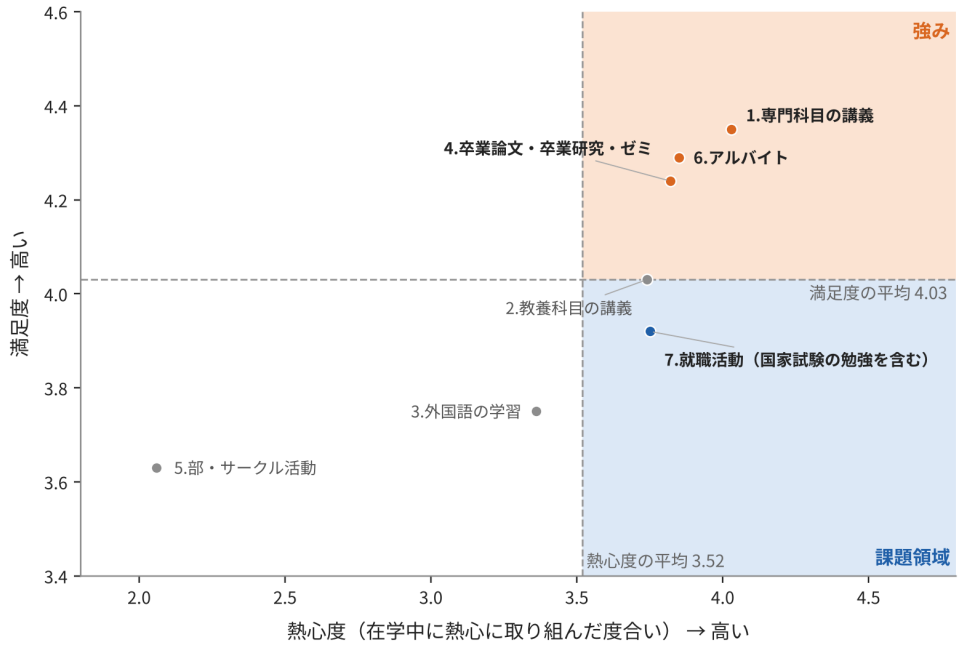


図 2：ポートフォリオ分析（縦軸＝満足度、横軸＝熱心度）全体（卒 *P17, P18, P20* の数値をもとに作図）

【データより】（卒 P17, P18, P20～P22）

- 熱心度が高いのは「専門科目の講義」（4.03 点）、「アルバイト」（3.85 点）、「ゼミ等」（3.82 点）。最も低いのは「部・サークル活動」（2.06 点）（卒 P17）。
- 満足度が高いのは「専門科目の講義」（4.35 点）、「アルバイト」（4.29 点）、「ゼミ等」（4.24 点）。低いのは「部・サークル活動」（3.63 点）、「外国語の学習」（3.75 点）（卒 P18）。
- ポートフォリオ分析では、【熱心度・満足度とも高い】が「専門科目の講義」「ゼミ等」「アルバイト」、【熱心だが満足度は平均未満】が「就職活動」（熱心度 3.75 点、満足度 3.92 点）であった（卒 P20）。
- 学部別では、文学部は「教養科目の講義」「外国語の学習」も熱心度・満足度とも高い一方、「就職活動」の満足度が 3.68 点にとどまる。生活科学部は「就職活動」の満足度が 4.13 点と高い一方、「教養科目の講義」が熱心だが満足度は平均未満であった（卒 P18, P21, P22）。

【解釈・考察】

- 専門科目やゼミ・卒業研究といった学びの中核が、熱心さ・満足度の両面で卒業生の大学生活を支えていると考えられます。
- 就職活動は熱心に取り組まれている一方で満足度が相対的に伸びておらず、特に文学部でその傾向がみられます。幅広い学びをどのように職業選択や自己 PR に結びつけるかという点に、支援の余地があると思われます。
- 生活科学部では教養科目の満足度が相対的に低く、専門・資格志向の強い学生に教養教育の意義をどう伝えるかが論点になると考えられます。
- 部・サークル活動の熱心度の低さには、対象学年の在学期間（2019～2022 年度）がコロナ禍と重なった影響も考えられます。

4. 在学中の経験と能力修得の関連（相関分析）（卒 P26～P41）

【データより】（卒 P27, P32, P37）

- 大学生活の総合的な満足度は多くの能力の修得度と相関がみられ、特に「親和力」（0.58）、「実践力」（0.56）、「計画立案力」（0.53）、「行動持続力」（0.51）、「自信創出力」（0.50）とは 0.5 以上の強い相関がみられた（卒 P32）。
- 「在学中を通じて自分は成長できたと実感できる」は、「行動持続力」（0.58）、「親和力」（0.57）、「実践力」（0.54）、「自信創出力」「計画立案力」「専門知識」（いずれも 0.51）と 0.5 以上の強い相関がみられた（卒 P37）。
- 「教員に親近感を感じた」は「親和力」（0.49）、「協働力」（0.41）、「計画立案力」（0.40）と、「授業中に自分から発言した」は「行動持続力」（0.44）、「協働力」（0.42）、「専門知識」「一般教養」（ともに 0.40）と、「自主的な勉強会や研究会に参加した」は「自信創出力」（0.46）と相関がみられた（卒 P37）。
- 「ゼミ等」の満足度は「親和力」（0.50）、「協働力」（0.45）、「自信創出力」（0.42）など幅広い能力と、熱心度は「協働力」（0.41）と相関がみられた（卒 P27, P32）。

【解釈・考察】

- 相関は因果関係を示すものではありませんが、教員との距離の近さ、授業での発言や自主的な学びといった能動的な経験、ゼミでの充実した経験が、幅広い能力の修得実感と結びついていると考えられます。
- 課題領域となった自信創出力・行動持続力は、成長実感や総合満足度と強く関連する項目でもあります。「成長できた」と実感できる経験を在学中に積み重ねることが、これらの力の実感を高めるうえで重要と思われます。

5.「PROG 白書 2021」卒業生調査（13 大学全体）との比較（卒 P42～P51）

全国 13 大学の卒業生を対象とした「PROG 白書 2021」卒業生調査（2013～2016 年度卒、N=1,548、2020～2021 年実施）の結果と比較しました。差が+0.2 以上（または-0.2 以下）の項目を特徴とみなしています。

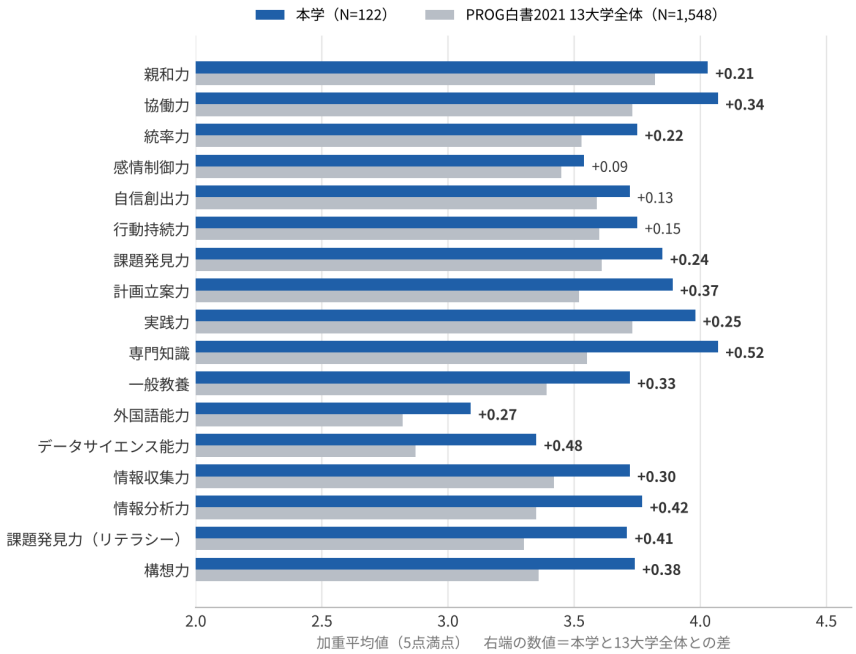


図 3：修得度の比較（卒 *P49* の数値をもとに作図）

比較項目	上回る項目（+0.2 以上）	下回る項目（-0.2 以下）
熱心度（卒 P45）	アルバイト（+0.44）、就職活動（+0.35）、ゼミ等（+0.32）、教養科目（+0.31）、専門科目（+0.30）	部・サークル活動（-0.34）
満足度（卒 P46）	専門科目（+0.49）、就職活動（+0.44）、ゼミ等（+0.42）、教養科目（+0.41）、外国語（+0.37）、アルバイト（+0.32）	部・サークル活動（-0.27）
学修経験・成長実感（卒 P47）	教職員へのキャリア相談（+0.43）、他の学生との議論（+0.40）、授業中の発言（+0.30）、教員への親近感（+0.23）、自主的な勉強会（+0.21）、成長実感（+0.21）	なし（「授業についていけなかった」は-0.27 で、本学の方が低い）
必要度（卒 P48）	専門知識（+0.40）	感情制御力（-0.25）
修得度（卒 P49）	17 項目すべてで上回る（図 3）	なし
卒業論文等の意義（卒 P50）	自分の主張をわかりやすく伝える方法を学ぶ経験（+0.49）、色々な人と議論する経験（+0.38）、主体的な学習態度を養う経験（+0.37）など	なし（全 6 項目で上回る）
キャリア意識（卒 P51）	職場外で自主的に学んでいる（+0.33）、仕事に対する満足度（+0.29）、意欲的に取り組める（+0.26）、キャリアを自分で切り開いていける（+0.25）など	なし（全 6 項目で上回る）

【データより】（卒 P45～P51）

- 修得度は 17 項目すべてで 13 大学全体を上回った。差が大きいのは「専門知識」（+0.52）、「データサイエンス能力」（+0.48）、リテラシー領域（+0.30～+0.42）。差が小さいのは「感情制御力」（+0.09）、「自信創出力」（+0.13）、「行動持続力」（+0.15）（卒 P49）。
- 学修経験では「教職員へのキャリア相談」「他の学生との議論」が特に上回り、卒業論文等の意義、就業後のキャリア意識も全項目で上回った。下回ったのは部・サークル活動（熱心度・満足度）と感情制御力（必要度）に限られる（卒 P45～P51）。

【解釈・考察】

- 教職員との距離が近く、授業の中で議論・発言する機会が多いという本学の学修環境の特徴が、他大学との比較からも確認されたと考えられます。卒業後も職場外で自主的に学ぶ姿勢が比較集団より高い点は、在学中の学びの姿勢が卒業後にも続いていることを示す一つの手がかりと思われます。
- 一方、対自己基礎力（感情制御力・自信創出力・行動持続力）は比較集団との差が小さく、ポートフォリオ分析で課題領域となった項目とも重なります。本学の教育で相対的に伸ばしきれていない領域である可能性が考えられます。
- ただし、比較集団とは卒業年度・調査時期が異なること、また回収率（25.1%）から、回答者が大学に好意的な層にやや偏っている可能性もあることに留意が必要です。

Ⅱ．企業調査の結果

1．調査概要（企 P4）

【データより】（企 P4）

- 調査対象：本学卒業生を採用している企業・団体
- 調査方法：インターネットによるアンケート調査／調査期間：2026 年 5 月 25 日～6 月 15 日
- 発送数 200 社（不達 1 社）、集計対象 123 社、回収率 61.8%
- 業種グループ：製造・建設 13 社、流通・インフラ 32 社、専門サービス・金融 19 社、医療・福祉・教育 30 社、公務 15 団体、その他 14 社

2．新卒段階での必要度と卒業生の印象（企 P8, P9）

【データより】（企 P8, P9）

- 必要度が高いのは「親和力」（4.66 点）、「自信創出力」（4.65 点）、「協働力」（4.64 点）。低いのは「外国語能力」（2.46 点）、「データサイエンス能力」（3.08 点）、「一般教養」（3.37 点）（企 P8）。
- 卒業生の印象が高いのは「親和力」（4.45 点）、「協働力」（4.39 点）、「自信創出力」（4.27 点）。低いのは「外国語能力」（3.13 点）、「データサイエンス能力」（3.33 点）、「専門知識」（3.49 点）で、上位・下位とも必要度とほぼ共通（企 P9）。
- 医療・福祉・教育では、本学独自項目「フェアな視点・態度」が必要度（4.48 点）・印象（4.09 点）とも同グループ内の上位に入った（企 P8, P9）。

3. ポートフォリオ分析（必要度×印象）（企 P11～P18）

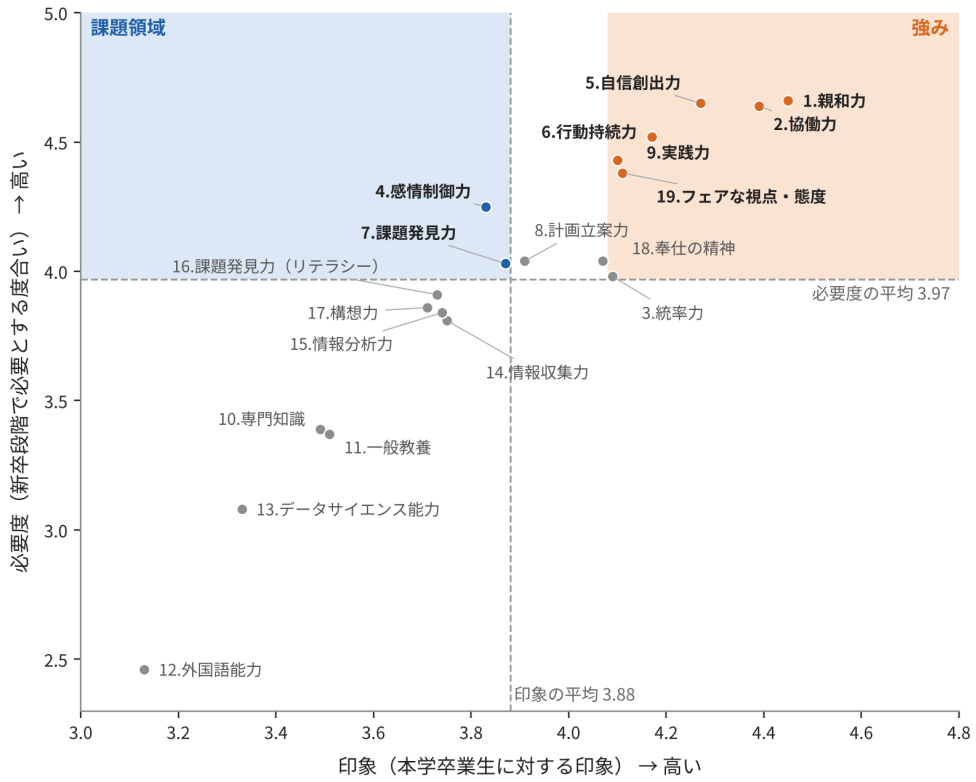


図 4：ポートフォリオ分析（縦軸＝必要度、横軸＝印象）全体（企 *P8, P9, P12* の数値をもとに作図）

※図 4 の項目番号は、卒業生調査の番号に統一して表記しています。

【データより】（企 P12～P18, P27）

- 【強み】（必要度が平均以上かつ印象が平均+0.2 点以上）は「親和力」「協働力」「自信創出力」「行動持続力」「実践力」「フェアな視点・態度」の 6 項目（企 P12）。
- 【課題領域】（必要度が平均以上かつ印象が平均未満）は「感情制御力」「課題発見力」の 2 項目（企 P12）。
- 業種グループ別では、「親和力」「協働力」はすべてのグループで強み。課題領域は、医療・福祉・教育で「感情制御力」、流通・インフラで「課題発見力（リテラシー）」であった（企 P14, P16, P27）。

4. 採用意欲と採用段階の重視度（企 P20, P21）

Q9. 本学卒業生の採用意欲について、当てはまるものをひとつお選びください。（全体／単一回答）

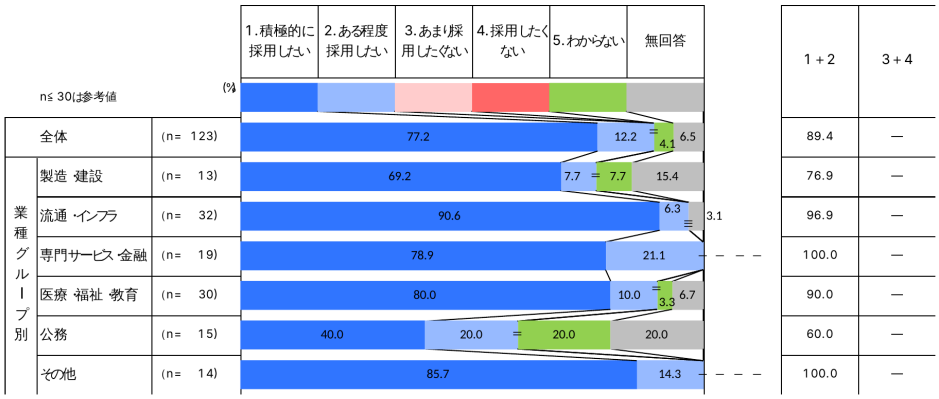


図 5：本学卒業生の採用意欲（企 *P20*）

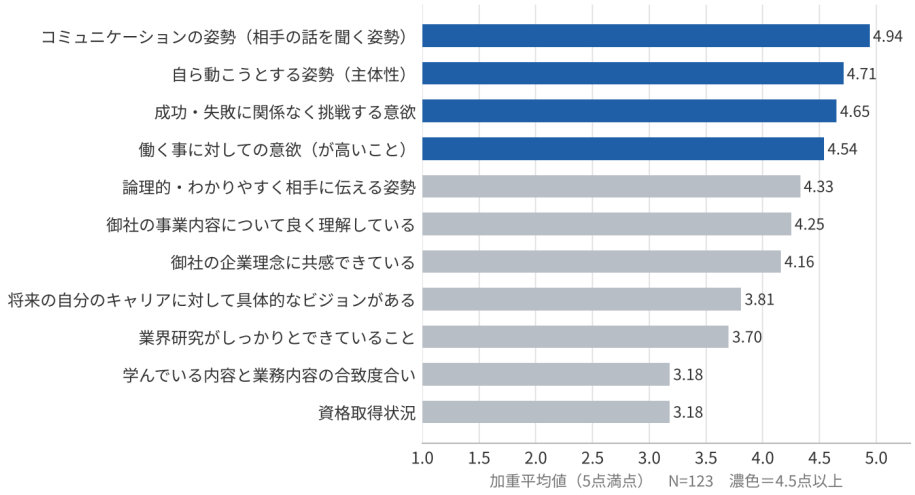


図 6：採用段階で重視すること 全体（企 *P21* の数値をもとに作図）

【データより】（企 P20, P21）

- 「積極的に採用したい」77.2%、「ある程度採用したい」12.2%で、計 89.4%が採用に前向き。「あまり採用したくない」「採用したくない」は 0%。流通・インフラでは「積極的に採用したい」が 90.6%（企 P20）。
- 採用段階で重視されるのは「コミュニケーションの姿勢（相手の話を聞く姿勢）」（4.94 点）、「自ら動こうとする姿勢（主体性）」（4.71 点）、「成功・失敗に関係なく挑戦する意欲」（4.65 点）。「学んでいる内容と業務内容の合致度合い」「資格取得状況」（ともに 3.18 点）は低い。医療・福祉・教育では「資格取得状況」が 4.11 点と他グループより高い（企 P21）。

5. 卒業生の印象と採用意欲の関連（相関分析）（企 P23, P24）

【データより】 （企 P24）

- 採用意欲は、卒業生の印象のうち「親和力」（0.46）、「実践力」（0.42）、「行動持続力」（0.39）、「統率力」（0.35）、「協働力」（0.32）、「課題発見力」（0.30）と 0.3 以上の有意な正の相関がみられた。
- 「学んでいる内容と業務内容の合致度合い」を重視する企業ほど、「一般教養」（0.39）、「専門知識」（0.34）の印象が高い傾向がみられた。

【解釈・考察】

- 企業からは、人当たりの良さや協働する姿勢に加え、前向きさ（自信創出力）、粘り強さ（行動持続力）、実行力（実践力）が評価されており、それらの印象が採用意欲の高さとも関連していると考えられます。
- 「感情制御力」「課題発見力」は企業の期待に対して印象が相対的に低く、本学として伸ばしていくべき領域と思われます。課題発見力は採用意欲との相関もみられる項目です。
- 採用時には専攻と業務の合致や資格よりも、コミュニケーションの姿勢・主体性・挑戦意欲が重視されています。専門性に加えて、学びを通じて培われる姿勢や行動特性が評価の中心にあると考えられます（医療・福祉・教育など資格を前提とする分野を除く）。

6. 採用で重視される経験・本学の印象・インターンシップ（企 P71～P86）

【データより】 （企 P71, P72, P74, P86）

- 新卒者の評価で重視する在学時の経験（複数回答）は「部活動・サークル」67.5%、「アルバイト」65.0%、「ボランティア」43.1%、「資格取得」36.6%、「ゼミ・卒業研究」30.9%の順。医療・福祉・教育では「専門科目（演習・実験・実習）」60.0%、「資格取得」56.7%、「専門科目」53.3%が高い（企 P71）。
- 本学の印象（複数回答）は「伝統や実績がある」53.7%、「就職支援が充実している」49.6%、「学生に活気がある」48.8%、「教育内容が充実している」47.2%、「地域連携に力を入れている」44.7%が上位。一方、「大学全体の教育方針が明確である」は 14.6%、「各学部の教育方針が明確である」「産官学連携に力を入れている」はともに 10.6%（企 P72）。
- 本学学生へのインターンシップ等の実施は、「実施可能又は希望」が計 74.8%、「実施しない」は 7.3%（企 P74）。
- 「学業に励む」ことの準備開始時期は「大学 1 年生から」が 87.8%（企 P86）。

【解釈・考察】

- 企業は採用評価において部活動やアルバイトなど学業以外の経験も重視している一方、卒業生調査では部・サークル活動の熱心度・満足度が比較集団を下回っていました。正課外の経験機会のあり方は、検討の余地がある点と思われます。
- 就職支援や地域連携は企業からも評価されている一方、教育方針の明確さについての印象は相対的に低く、本学のディプロマ・ポリシー（DP：卒業認定・学位授与の方針）や学修成果を社会に向けて発信していく余地があると考えられます。
- 7 割を超える企業がインターンシップ等の実施に前向きであり、学生が企業と接点を持つ機会として活用できる可能性があります。

Ⅲ. 両調査からいえること

卒業生の自己評価（修得度）と企業からの評価（印象）を、19 項目の能力で対比しました。◎＝ポートフォリオ分析の「強み」、▲＝「課題領域」です。

能力項目	卒：必要度	卒：修得度	卒：判定	企：必要度	企：印象	企：判定
1.親和力	4.25	4.03	◎	4.66	4.45	◎
2.協働力	4.27	4.07	◎	4.64	4.39	◎
3.統率力	3.88	3.75	▲	3.98	4.09	
4.感情制御力	3.97	3.54	▲	4.25	3.83	▲
5.自信創出力	3.98	3.72	▲	4.65	4.27	◎
6.行動持続力	3.92	3.75	▲	4.52	4.17	◎
7.課題発見力	3.89	3.85		4.03	3.87	▲
8.計画立案力	3.91	3.89		4.04	3.91	
9.実践力	3.94	3.98	◎	4.43	4.10	◎
10.専門知識	3.09	4.07		3.39	3.49	
11.一般教養	2.75	3.72		3.37	3.51	
12.外国語能力	2.57	3.09		2.46	3.13	
13.データサイエンス能力	2.90	3.35		3.08	3.33	
14.情報収集力	3.55	3.72		3.81	3.75	
15.情報分析力	3.65	3.77		3.84	3.74	
16.課題発見力（リテラシー）	3.68	3.71	▲	3.91	3.73	
17.構想力	3.67	3.74	▲	3.86	3.71	
18.奉仕の精神	3.19	3.69		4.04	4.07	
19.フェアな視点・態度	3.83	4.01		4.38	4.11	◎
全項目平均	3.63	3.76		3.97	3.88	

出典：卒 P7, P8, P10／企 P8, P9, P12。色分け：橙＝強み、青＝課題領域。判定基準（強み：必要度が平均を上回り〔企業調査は平均以上〕、修得度・印象が平均+0.2 点以上／課題領域：必要度が平均を上回り〔同〕、修得度・印象が平均未満）は報告書本体の基準によります。

【データより】（卒 P8, P10／企 P9, P12）

- 両調査で共通の強み：「親和力」「協働力」「実践力」。
- 両調査で共通の課題領域：「感情制御力」。
- 卒業生では課題領域、企業では強み：「自信創出力」「行動持続力」。企業の印象は 4.27 点・4.17 点と高いが、卒業生の修得度は 3.72 点・3.75 点と平均を下回る。
- 企業のみ課題領域：「課題発見力」。卒業生の修得度は 3.85 点で平均を上回る。
- 卒業生のみ課題領域：「統率力」「課題発見力（リテラシー）」「構想力」。企業の印象は、統率力は平均を上回り（4.09 点）、リテラシーの 2 項目は平均をやや下回る（3.73 点・3.71 点）。
- 本学独自項目「フェアな視点・態度」は、卒業生の修得度が 4.01 点と高く、企業調査では強みとなった。

【解釈・考察】

- 親和力・協働力・実践力は、卒業生の実感と企業の評価が一致しており、本学の教育を通じて育まれている中核的な強みと考えられます。本学独自項目の「フェアな視点・態度」が両調査で高く評価されている点は、キリスト教精神に基づく本学の教育理念とも関わる特徴の一つと思われます。
- 自信創出力・行動持続力は、企業からは高く評価されている一方で、卒業生自身の実感は相対的に低いという「評価のずれ」がみられます。卒業生が自らの強みを十分に自覚できていない可能性があり、他者からの評価を学生に還元する機会が、自己理解や自信の形成に役立つと考えられます。
- 課題発見力は逆に、卒業生は身についたと感じている一方で企業の評価は相対的に低く、自己評価と他者評価にずれがある領域と考えられます。
- 感情制御力は両調査で課題領域となっており、職場でのストレス場面に対応する力を在学中に育む機会づくりは、優先度の高い検討事項と思われます。

Ⅳ. まとめ・考察・今後本学が検討していく点

まとめ（事実の整理）

【データより】

- 卒業生調査：大学生活の総合満足度は 91.8%。専門科目・ゼミ等・アルバイトが熱心度・満足度とも高く、就職活動は熱心だが満足度が相対的に低い。能力面の強みは親和力・協働力・実践力、課題領域は対自己基礎力（感情制御力・自信創出力・行動持続力）を中心とする 6 項目。修得度は 17 項目すべてで 13 大学全体を上回るが、対自己基礎力は差が小さい。
- 企業調査：89.4%が本学卒業生の採用に前向き。強みは親和力・協働力・自信創出力・行動持続力・実践力・フェアな視点・態度、課題領域は感情制御力・課題発見力。採用時はコミュニケーションの姿勢・主体性・挑戦意欲が重視される。
- 両調査の対比：親和力・協働力・実践力が共通の強み、感情制御力が共通の課題。自信創出力・行動持続力・課題発見力では、卒業生と企業の評価にずれがみられる。

考察

【解釈・考察】

- 本学の強みは、教職員との距離が近く、授業での議論やゼミ・専門科目に熱心に取り組める環境の中で、人と協働しながら物事を実行する力を育んでいる点にあると考えられます。この点は卒業生・企業の双方から確認されています。
- 一方で、気持ちの制御や自信・粘り強さといった対自己基礎力は、卒業生自身の実感が十分でない領域と思われます。これらは、適度な負荷のかかる経験とその振り返りを通じて育まれやすい力であり、コロナ禍で正課外活動の機会が限られた世代であったことも影響している可能性が考えられます。

今後本学が検討していく点

【解釈・考察】

- **①強みを支える学修環境の維持と可視化：**ゼミ・専門科目、教職員との対話やキャリア相談は、能力修得や満足度と強く関連しています。少人数教育の良さを維持しつつ、学修成果とディプロマ・ポリシーとの対応を学生や社会にわかりやすく示していくことを検討します。企業から「教育方針が明確」との印象が相対的に少なかったことからも、発信の工夫が求められると考えています。
- **②対自己基礎力を育む機会の設計：**グループワークでの役割経験、学外での実践、正課外活動への参加支援など、適度な負荷のかかる経験と振り返りを組み合わせた学修機会のあり方を検討します。企業が部活動・アルバイト等の経験を重視していることも踏まえ、正課と正課外の学びのつながりを意識していきます。
- **③自己評価と他者評価をすり合わせる機会の充実：**企業から高く評価されている点（自信創出力・行動持続力など）を学生にフィードバックするとともに、アセスメントや実習・インターンシップ先からの評価を活用した振り返りを通じて、学生が自らの強みを自覚し言語化できるよう支援する方策を検討します。
- **④課題発見力を育む学修の充実：**地域や企業と連携した課題解決型学修（PBL：Project Based Learning）などを通じて、「問いを立てる」経験を増やすことを検討します。7 割を超える企業がインターンシップ等の実施に前向きであることも、連携の足がかりになると考えられます。
- **⑤学びとキャリア選択の接続：**特に文学部では就職活動の満足度が相対的に低いことから、幅広い学びをキャリア選択や自己 PR に結びつける支援を、キャリア支援部門と学部が連携して検討します。あわせて、教養教育の意義を学生に伝える工夫も検討課題と考えています。

本学は、今回の調査結果を教育課程や学生支援の改善に向けた基礎資料として活用するとともに、今後も継続的に検証を進めてまいります。